

「週刊女性自身」で矢野医師の記事が掲載されました



徘徊の可能性が出たときに頼れる「人&サービス」	
ケアマネジャー	介護のケアプランの作成、認知症介護で家族が困っているときの解決策の提案など、相談に乗ってくれる
かかりつけ医	薬の量のコントロールや、介護保険の介護サービスを受けられるように要介護認定の見直しをしてくれたりする
認知症サポーター	認知症を正しく理解し、認知症の当事者やその家族の手助けをしてくれる。最寄り自治体の関係機関と連携を図り、見守りや傾聴、徘徊の早期発見・対応に貢献する
認知症地域支援推進員	全国の市区町村には、認知症に関する相談、制度やサービスの案内などしてくれる認知症地域支援推進員がいる。徘徊の悩みや介護サービス、治療のことなど相談できる
民生委員	厚生労働大臣から委嘱された非常勤の地方公務員。高齢者世帯への訪問や見守り活動を行い、生活に関する相談に乗ってくれる
地域包括支援センター	認知症でも「要支援」に該当したとき、地域包括支援センターの職員がケアプランを作成してくれる。介護で困ったことがあったら真っ先に相談するべき機関
認知症サロン	認知症の当事者やその家族などが定期的に集まり、参加者の介護経験を話したり、困っていることを相談する場。病院内や介護事業所、NPOなど民間団体でも実施している
見守りネットワーク	行政や福祉関係者、民生委員、町内会、NPO法人などが、高齢者に関する地域の情報を共有したり捜したりする。自治体によっては緊急通報装置などを貸与してくれることも

すると、逆効果です。行動のじやまをする人と思われてしまい、言うことを聞かなくなってしまうこともあるので注意が必要です（矢野先生、以下同）

徘徊しそうなようになったときに、矢野先生が家族に勧めている対処法は、寄り添うことだという。「たとえば、お父さんが「会社に行かなければ」と支度をしていまして。叱ったり、止めたりしないで一緒に外に出て、歩きなからほかの話を聞いて気分転換をしてみよう。会社に行こうとした

「知っている認知症にまつわるサービス」

そんなときこそ一人で抱え込まず、ふだんから隣近所の人や民生委員とつながるだけでなく、行政サービスなどの情報を手手してお

発生件数は10年で倍増……
頼れる制度・サービスでいざ、に備えを

認知症徘徊 年1万8千人が行方不明!

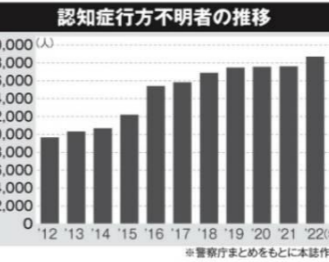
最新の警察庁の発表によると、22年は認知症による行方不明者が過去最多で、4人が遺体で見つかった。最愛の家族の失踪を未然に防ぐためにできることは――。

人生100年時代を迎えて、長生きリスクのひとつが、認知症。高齢化に伴い、認知症になる人は増え続け、2025年には65歳以上の5人に1人、約700万人が認知症になると推計されている。そのうえ、徘徊で行方不明になる人が急増していることも問題。警察庁によると、22年、認知症の数は1万8千700人と過去最多を更新。12年の統計開始から10年連続、増加の一途をたどる。

「高齢者の行方不明は前期高齢者（65歳以上74歳以下）と、後期高齢者（75歳以上）で状況は変わってきます。前期高齢者はまだ体力があり足腰が丈夫なので、公共交通機関などを使って遠出してしまふ恐れがあり、ケガや事故に巻き込まれる危険性があるのです。今の時期、熱中症になるリスクも高まるので、注意が必要です」

そう警鐘を鳴らすのは、中部脳リハビリテーション病院、中部療護センター（岐阜県美濃加茂市）副センター長で脳神経外科医の矢野大仁先生。

16年、桜美林大学老年学総合研究所が公表した調査によると、徘徊で行方不明となった場合、発見することを忘れて、勝手に自宅に戻ったというケースもあります。そこで問題になるのは、世話をする家族の負担が増えること。毎日寄り添いたいと思っても、介護する側にも負担がかかり、体力的、精神的に限界がきてしまう。



徘徊による行方不明を防ぐ方法とは？

認知症の人が徘徊で行方不明になると、各市区町村で発行している認知症に関する制度やサービス内容などが掲載されたガイドブック「認知症ケアパス」を地域包括支援センターなどで入手しよう。現在介護保険のサービスを使っている要介護1～5の人は、ケアマネジャーに今直面している認知症の問題を相談してみよう。またかかりつけ医も、症状を伝えるための種類や量を調整してくれるだけでなく、介護保険のサービスを多く受けられるように要介護認定の見直しも検討してください。また全国には、認知症に関する相談、制度やサービスの案内などをしてくれる認知症地域支援推進員がいるので、徘徊の悩みや介護サービスのことを相談してみよう。困ったときに手助けしてもらえらる「認知症サポーター」という頼りになる存在もいる。要支援や自立など、要介護度が軽いケースが多い。「地域包括支援センター」で相談をすると、定期的に「見守り」をしてもらえるほか、必要なら行政サービスを教えてくれます。認知症の当事者と家族にとって心強いのが、各自自治体にある「見守りネットワーク」だ。

高齢者が行方不明になったときに、警察だけでなく、地域の関連団体が捜索に協力して、すみやかに



なってしまう原因に、認知症の中核症状である「記憶障害」と「見当識障害」がある。

認知症の初期の段階では、夕食を食べたことを忘れたり、直近から数日前までの記憶が失われたりという記憶障害が起こる。また、見当識障害は、今の時間や場所がわからなくなるので、外出先でパニックに陥ることがある。「たとえば、夕方になると自宅にいてもおかかわらず、昔の記憶がよみがえり、「自宅に帰る」と外に出てしまう。落ち着きなくして出かけようとする症状のことを「夕暮れ症候群」といい、環境の変化によるストレスが原因で起こるともいわれています。

そんなとき、徘徊しないようにドアの鍵を外かけたり、靴を隠したりして外出できない、靴を

認知症徘徊の予防法

認知症にまつわるサービス

について紹介されています。